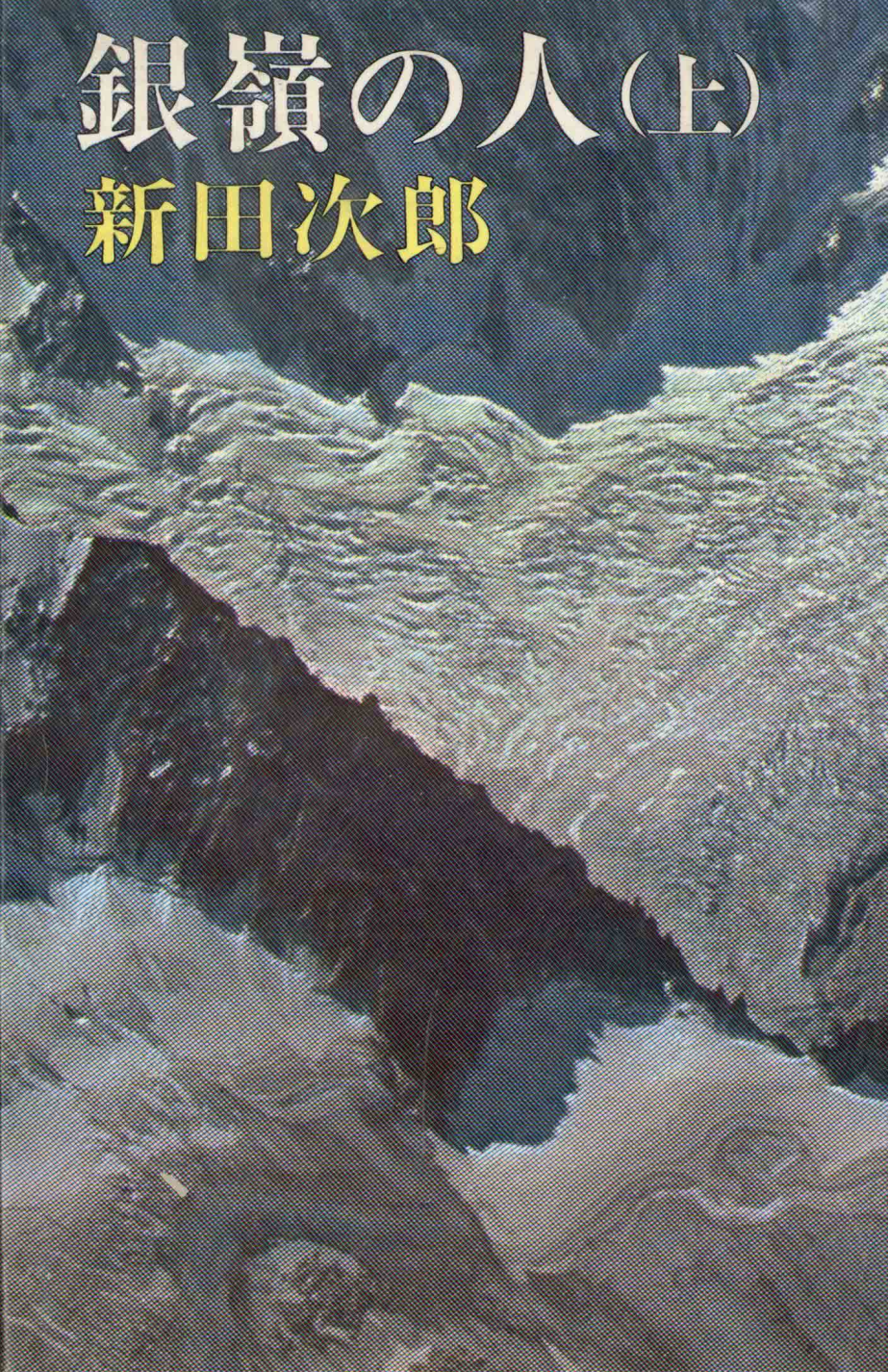
銀嶺の人（上）

新田次郎



銀嶺の人（上）

新田次郎

新潮社版

銀嶺の人（上）

昭和五十年十月五日印刷
昭和五十年十月十日発行

価七八〇円

著者　新田次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部〇三―二六六―五一一一
編集部〇三―二六六―五四一一
振替　東京　四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社　製本・新宿加藤製本株式会社
© Jiro Nitta, Printed in Japan, 1975

銀嶺の人（上）　目　次

第一章　泣かない子……5
第二章　ハーケンが歌う……43
第三章　マチガ沢のヴィーナス……81
第四章　白衣を着た巨人……119
第五章　その前夜……157
第六章　マッターホルンの北壁……195

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

銀嶺の人

（上）

装幀写真・近藤　等

第一章　泣かない子

強い南風がつめたかった。それよりも風と共に吹きつけて来る雪のほうが気になった。霧が視界を消した。

彼女は横岳の稜線で立止った。こんな筈はないと思った。昨夜、行者小屋でラジオの気象放送を聞いて描いた天気図にも異常はなかったし、天気予報も格別に悪くなるようなことを報じてはいなかった。ではいったいなぜ、突然南風が強くなり、雪が降りだしたのであろうか。

（一般に冬の八ケ岳は西風が強い）

と、どの本にも書いてあった。確かに、彼女が、行者小屋から中岳を経て、赤岳の頂上に立ったときには西風が吹いていた。天気もよかった。だから天気が急変したという事実よりも、それに裏切られたことが彼女にはこたえた。彼女は周囲の誰よりも上手にしかも速く天気図を描くことができたし、それによる天気の見とおしも、いままで期待はずれということはなかった。今度は見事に予想がはずれたがラジオで聞いた天気予報も、特に悪くなるようには云ってはいなかったのだから彼女の見当はずれだったことにはならない。

気象庁さえ、この急変には気付いていなかったのだとあきらめればいいのだが、彼女は、豹変した冷たい顔には、それほど寛容ではなく、こうなったら、風にも吹雪にも簡単に負けたくはないと思いこんでいた。

これがほんとうの冬山の顔だというならば、その顔をじっくりと見たいと思った。声を聞きたかった。体温も測ってやりたかったし、脈搏も知りたかった。

横岳は痩せ尾根である。夏期においても、一歩々々に神経を使うところだった。冬は、氷と雪に覆われている。尾根筋は部分的に堅氷に閉ざされていた。

彼女が靴底に付けたアイゼンの爪は堅氷に突き刺さったというよりも、乗ったという感じだった。彼女が難所にさしかかったからと云って、風が一時的に止むということはなかった。風はほとんど連続的に背後から彼女を押していた。

彼女はできるだけ重心を下げるために背を低くした。前かがみになると、風はルックザックの底を突いた。

山の頂を吹く風は水平ではなく、或る角度を以て吹き上げるものだということは知っていたが、現実にその恐ろし

さを知らされたのは、強風にルックザックの底を押されたときだった。下から突き上げられると、頭を先にして転倒するおそれがあるから、それにこたえようとする。つまり、彼女は、背後に向って押し返すような力を働かせねばならなかった。

一定風速の追い風ならば風にもたれかかればよい。少なくともそんな気持でいても、まずまず心配はなかったが、それが強風の場合は吹き飛ばされまいと耐えている自分自身の力によって、風が止んだ瞬間うしろ向きにおし倒される心配があった。

横岳は素直に延びた尾根ではなかった。ところどころに岩峰があり、それらには、信仰登山の盛んだった昔から、いちいち仏教にちなんだ名がつけられていた。

風は、それらの岩峰に当って、いちじるしく流れの様相を変えた。風下には、複雑な渦流が生じ、そこにはあらゆる方向の風が荒々しく存在した。

強風がひとたび乱流化すと始末に負えなかった。

風は前方から或いは後方から、時によると、側面から彼女を押し倒そうとした。

吹雪が彼女の雪眼鏡に覆いをしようとした。そうしなくとも、ほとんど視界はゼロに近い状況だったが、彼女の防風衣（ウインドヤッケ）の頭巾の隙間を埋めようとして執拗に吹きつけて来る雪は邪魔だった。厳密に云えば彼女にとって、冬山の経験は初めてではなかった。しかし、冬山で吹雪に遇ったことはなかった。三千メートル級の稜線の吹雪の怖さは知らなかった。

彼女は裏切り行為をした天気を許すことはできなかった。だから天気に参りましたと頭を下げたくはなかった。天気に対して、降参したくない気持が前進を強いた。

〈横岳の稜線さえ通過したら、後はたいしたことはないのよ〉

彼女は、八ヶ岳山麓の行者小屋まで同行して来た小林和江の言葉を思い出していた。小林和江は彼女の大学の先輩で、八ヶ岳の地理にくわしかった。その小林和江は深雪の中を行者小屋まで来る途中で、右足を軽く捻挫した。

長い長い単調な登り道にあきあきしたころ、雪道は針葉樹林帯に入り、そこにちょっとした沢を渡るところがあった。彼女はその下り坂で滑って転んだのである。なんでもないようなところで、なんの変哲もない転び方をしたのに和江は怪我をしたのである。行者小屋まではどうやら行きつくことはできたが登山は無理だった。

行者小屋には女性を交えたパーティーがいた。男性たちは翌朝、阿弥陀岳に登る予定であり、女性たちはそこから引き返すことになっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈ひとりでもいいから冬期南八ケ岳縦走をやって見たいわ〉

彼女が小林和江にそう云った瞬間、それは決定的なものとなってはねかえった。

〈おやりなさいよ、女流登山家駒井淑子さんの山歴に退却という言葉があってはならないわ。勿論、敗退などという不名誉を負って帰ることがあろう筈がないものね。私のことならもう心配しなくてもいいことよ、皆さんと一緒に引き揚げるから〉

和江はそう云った。引き止めるかと思っていた和江がおやりなさいと云った言葉の中には、幾分かの皮肉が含まれていた。駒井淑子が、女流登山家という云い方をひどく嫌っているのを知り切っていながら、この場でそれを云ったのは、やはり、捻挫した友人を他のパーティーにまかせて、自分だけでも冬山に入ろうとする彼女に対する批判だった。

〈小林さん、あなたの捻挫は、女流登山家という言葉を私に投げつけるほど重傷ではないわよ、そうではないかしら〉

駒井淑子は云うべきことはちゃんと云った。

〈あなたは女流登山家という言葉を意識しているから、それにこだわるんじゃあないの、私は私の起したアクシデントに私自身で責任を取るだけのことよ、捻挫がどの程度のものか、そんなことは問題にはしていないつもりよ。あなたはあなたでやればいいの……〉

最後をぷっつり切ったとき、二人の気持は完全に離れていた。

（和江さんの前で、縦走すると云い切った以上、多少の無理を押してもやらねばならない）

彼女はそのように自分に云い聞かせていながらも、吹雪が激しくなって、一歩々々に全力を挙げねばならなくなると、和江との言葉のいさかいなどにこだわってはおられなくなり、そういうことよりも、如何にしてこの危険な場を乗り切るかを懸命になって考えた。

稜線を一歩踏みはずせばまず生命はないものと思わねばならない。

彼女は、夏の間にこのルートを通ったことがあったが、その経験は今のところ、なんの役にも立たないほど場違いの感じがした。

（夏山と冬山とは別なものだ）

と、登山の教科書には書いてある。その教科書通りに未知なる山がそこにあり、それは思いもかけないように荒々しいものであっても、いまさら、どうにもならないことだった。

風が息をついた。急に温度が上ったようにさえ思われるほど、やわらかいものが彼女を包む。

霧に切れ目ができ、左手前方に突き出したような岩頭が見えた。その岩頭の形と、距離によって――霧は完全に霽れてはいないから目測による距離は曖昧だったが――彼女は、それが大同心峰であることを確認した。夏ならば主峰から尾根伝いに三十分もあれば往復できるところにあるのだが、今はその通路となる瘠せ尾根は氷雪の稜線となっていた。

霧が再び濃くなり、暴風雪となった。

彼女は、その白い岩頭を大同心峰の頂だと確認したとき、それまで持ち続けていた、山に対する自信のようなものを一瞬にして消失した。彼女は既に横岳の主稜線は突破して、そろそろ下り坂にかかるころだと思っていた。彼女は、距離にしてはさほどの差はないにしても、頭の中の地図と時間に狂いが生じ、現在位置を誤っていたことにショックを感じた。この状況では当然であったが、彼女にはそれが当然とは思われず、このごくありふれた錯誤が、次に来るべきものを予想させた。

横岳の主稜尾根は瘠せ尾根で危険だったが、道を誤ることはなかった。だが、そこを過ぎて下り坂にかかり、更に硫黄岳への鞍部に至った場合のことを考えた。夏ならばお花畑に覆われた広い場所だったが、今は雪に埋まった雪原である。

（大ダルミあたりで方向を誤り、下山ルートが発見できなかったら、どうしたらよいだろうか）

彼女は硫黄岳小屋が冬期間は雪に埋没されているということを本で読んで知っていた。

午後の一時を過ぎていた。

そのまま進んで硫黄岳から、夏沢乗越を経て、赤岳鉱泉に向うべきか、このまま、廻れ右をして、再び横岳の主稜尾根を強風に正対しながら戻って、行者小屋に行き着くべきかをきめる時であった。

身体は強風に吹かれたがためにかなり消耗していた。完全な防寒具をつけていたにもかかわらず、風は体温を低下させた。手足の指先の感覚が失われつつあった。岩を背に風を避けながら、なにか食べようかと思ったが、食事を摂っておられるような状態ではなかった。

（冬山において最も恐ろしいものは風である）ことはよく知っていた。体感温度が風速一メートル増すごとに一度ずつ低下することも知っていた。山の気温が零下何度であるということよりも、風速が何メートルあるかということのほうが肉体にとって重大であることも知っていた。風速を二十メートルとし、気温を零下十度と仮定すれば、体感温度は零下三十度であるという簡単な暗算によってすらも、そのままの状態を長く続けることは危険だった。

彼女は、硫黄岳の方へ眼をやった。どちらを向いても濃い霧でなにも見えないし、夏道は雪にかくされていた。地図と磁石によって方向を決めるなどということは、この吹雪の中ではでき得ることではなかった。

（それに私はひとり……）

と思ったとき彼女は和江の顔をちらっと思い浮べた。引き返すことが和江が云った敗退につながるかどうかは別として、冬山縦走を主張した彼女にとって、あまり名誉なことではなかった。だからと云って、このまま前進して吹雪の中で道を失って遭難に追いこまれた場合は、和江にそれ見なさいと笑われることになる。

彼女は、比較的冷静だった。前進か後退かを、自分自身で客観的に決定しようとした。

彼女は遭難という言葉を女流登山家という言葉と同様に嫌っていた。山における遭難という言葉には、なにかしら、合理性が欠けているような気がした。起るべくして起った結果だとしたら、それこそ敗北以外のなにものでもなかった。遭難という言葉には言いわけに近い逃げの姿勢が感じられた。だから嫌いだった。

遭難という言葉が思い浮んだとき彼女は前進を断念した。

彼女は廻れ右をして強風に正対した。

起伏の多い瘠せた岩稜の一つ一つの岩峰の根をたどるような歩き方をしながら、まともに強風を受けると呼吸の根さえ止められそうになっても、それはもう覚悟の上のことだと自分自身を納得させた。

暴風雪と正対しながら一歩々々をより確実にもと来た方向にもどして行けば、やがて、横岳の稜線は終り、赤岳の鞍部（コル）へ向う下り坂になる。その坂を下り切ったところに、右側（西側）におりる道があるのだ。夏には鎖がかかっていた。深雪に埋もれていたとしてもその場所を見逃すようなことはないだろうし、そこをしばらく降りて行けば、必ずや行者小屋行きの道を発見できるだろう。下へおりればおりるほど風は弱くなる。

彼女はそのように考えながら歩いていた。

*

横岳と赤岳の鞍部に出たことは確実だったが、行者小屋への道が分らなかった。濃い霧に閉じこめられた山頂では地形の比較ができなかったし、行者小屋への下降点にかけられた鎖は雪に埋もれて見えなかった。西側の急斜面は雪面に風のブラッシュがかけられ、雪の絶壁を形成していた。その斜面に足を踏みこむことはできそうもなかった。濃霧の為に下が見えないから危険で足が出なかった。

このあたりだという感覚だけで、行動はできなかった。

彼女は時計を見た。午後の三時である。意外に時間は経過していた。たとえ、行者小屋への下降点を発見したとしても、そこから行者小屋までの途中で道を失うことも考えられたし、夜になることも念頭に置かねばならなかった。そうなった場合は石室小屋に避難して一夜を明かそうと考えていた。

石室小屋は横岳と赤岳の鞍部にあった。何時間か前に近くを通ったが、この小屋へ泊ることなど考えてはいなかったから、その存在を確認せずに通り過ぎた。遠くの景色にみとれていたのか或いはそこを通り過ぎるとき、突風が起り、それに気を配っていて、見過したのか、山霧の一団が目に覆いをしたのかもしれない。夏の八ケ岳縦走の折、見掛けた覚えはあったが、現在の状態については、雪に埋没されてはいないという一般的なことしか知らなかった。

（石室小屋は冬期間を通じて雪に埋没されることはない。内部は雪が吹きこんでいて、快適なところとは云えないが避難所としては充分である）

と案内書に書かれてあった文句を思い浮べた。

彼女は冬山でビバーク（仮泊）したことはなかったが、一応その準備はして来ていた。必要品はルックザックの中に詰めこまれていた。

彼女は石室小屋を探した。鞍部は狭い場所だからすぐ石室小屋に行き当るだろうと思っていたが、その石室小屋が見つからないのである。一寸先が見えないような濃霧だった。霧の中を歩き廻っていると、いきなり足下に絶壁を思わせる空間が現われたり、雪庇の上を歩いていたりした。落ちついて、落ちついてと自分自身に云い聞かせていても、胸の動悸を押えることはできなかった。

迷ったという気持が彼女を不安におとし入れた。横岳と赤岳の鞍部だと思っているそこが、そうではないように思われる。途中で尾根をそれてしまったのかもしれないという心配もあった。

彼女は心に落ちつけ落ちつけと号令を掛けながら、頭の中にある案内書を読みかえし、頭の中にひろげたままになっている地図を見た。夏山のときの経験を思いかえしてみた。道を間違えたとは思われなかった。

赤岳と横岳の鞍部にいることは間違いなかった。そう広くない鞍部だから、探せば必ず石室小屋はある筈だ。眼と鼻の先にあるのかもしれない。霧が邪魔しているだけのことなのだ。

彼女は眼前の霧を追い払うかのようにピッケルを振った。濃い霧の奥に、動く影のようなものが見えた。人の影だとはっきり断定はできなかった。霧の濃淡の境目にできた虚像かそれとも——。

彼女は幻視を見たとは思いたくなかった。しかし、見なかったと否定もできなかった。幻視を見るような状態に立ち至ってはいないのだと、自分を叱っても、霧の奥に動いた物への恐怖から逃れることはできなかった。

（ひょっとしたら私と同じように吹雪の中に道を迷った登山者が、石室小屋を探しているのかもしれない）

そんなことをふと考えたが、それは、人が居て欲しいという期待であって、何等の根拠はなかった。暮から正月にかけての休日には、かなりの人数がこのあたりを通ったであろう。しかし、その時期を過ぎたいまごろ、このあたりをうろつく者はいないだろう。

霧の中に浮んだ影は一つだった。

（一人でこの吹雪の中を歩き廻る者はよほどのおろか者だ）

と彼女は影を含めて自分に云った。天気が崩れ出したとき、いそいで、下山してしまえばよかったのだ。しかしそれほど悔いてはいなかった。どうにもならないことにくよくよしたくなかった。今は早急に次の手段を取らねばならない。小屋が見つからないときまれば、雪洞を掘らねばならなかった。その経験はなかったが、本で読んだ知識があった。こういうときには、時間的にそれをしなければならないものだと思いこんでいた。しかし、その吹きっさらしの尾根には、雪洞を掘れるような場所はなかった。強いて掘るとするならば、稜線をはずさねばならない。それはまことに危険なことであった。

雪洞を掘るという目的のために、雪洞を掘るにふさわしい場所を探し始めたとき彼女はやや落着きを取戻していた。

彼女は雪のことだけを考えながら、ほとんど這い廻るようにして歩いた。西風が強いために、稜線の西と東では雪の状態が違っていた。

彼女はやや積雪量の多い場所に行き当った。雪の傾斜面に沿って歩いて見て、その場に横穴を掘れば、どうにか一夜はしのげそうな気がした。

彼女は風下に廻ってピッケルをふるった。スコップは持っていなかった。ピッケルだけで雪洞を掘るということは至難のことのように思われた。おそらく、雪洞ができないうちに夜を迎えるだろう。気温は急速に下降していた。夜になって吹きさらしの中にいることなどできなかった。

彼女は雪洞を掘ることを止めた。

丁度彼女が、横岳の岩稜を縦走中に、進むべきか退くべきかを考えたように、この危機をどうして離脱したらよいかを考えた。いよいよ追いつめられたのだと思うと、かえって気持が落ちついた。小屋は無い、雪洞も掘れないと決って、霧の奥にどす暗い夜を望見したとき彼女の度胸は据

わった。小屋は必ずある。もう一度心を落着けて探すことだ。

彼女は居直った気持でピッケルを思い切って斜め横にさしこんだ。そのピッケルの先に手応えがあった。ピッケルの先になにかが当ったのである。石のような感じだった。

彼女はピッケルを抜き取り、続け様に何回か雪面を、いろいろの角度から突いた。ピッケルの石突に当ったものの形がやや判明して来た。

(なにかの陰にできた雪の吹き溜りかしら)

その考えが浮んだとき彼女は、危うく大きな声で叫ぶところだった。その石突の先に当ったものこそ石室小屋の壁ではないだろうか。

彼女は数分後に石室小屋を発見した。おそらくその近くを何度か通ったであろう。わざわざ石室小屋を避けるようにして歩いていたのかもしれない。

小屋の中まで風は吹きこんでは来なかった。内部は半ば雪に埋もれていたが、風によって奪い去られていた熱量がここではほっとするほど暖かい感じとなって彼女に返還された。

助かったと思った。彼女は雪眼鏡をはずし、石室小屋の内部の暗さに馴れるために、しばらくはそのままの姿勢で立っていた。暗闇の中になにかがあった。それは吹きこんで積っている雪とは異質のものに思われた。心の中で恐怖がうごめいた。彼女は思わずピッケルを握った。

それは動いた。人であろうと思ったが、人だとはっきり確かめられるほど暗さに眼が馴れてはいなかった。

彼女は、一歩、二歩と戸口の方へ下った。うごめくものが立上ったら、外へ逃げ出そうと思った。半開きになったまま、雪と氷に埋まっている戸に彼女のルックザックが当った。

彼女は自らのルックザックに激励されたように立直った。彼女はかまえていたピッケルを雪の中に立て、闇に向って呼びかけた。

「どなたですか」

「ああ」

という深い溜息に似た声が聞えた。男の声のようではなかった。

「どなたですの」

「若林美佐子です」

その声が返って来たとき、駒井淑子の眼もようやく闇に馴れた。雪の上に大きなルックザックをおろして、その上に腰かけている登山者の姿をおぼろげながら認めることができた。

「私は駒井淑子です。あなたもお一人なんですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com